はじめに－実践研究（１）；異なりが生む葛藤、葛藤が導く理解－

日本語教育実践研究（１）は、「学習者の多様化」、「支援や学習の場の多様化」がいわれるなか、「日本語教育」をどのように展開していけるかを課題として実践研究を進めています。その場が、『にほんご わせだの森』という「教室、のようなもの」であり、受講生は「地域」と「ことば」と「教育」をめぐって自ら考え自らの実践を組み立てていきます。開講されて７年、こうした「目的」も浸透してきたように思えます。2012年度春学期は受講生７名が全 10 回の実践を実施し、これまでの学期と同様に、話し合いを重ねながら

・教室の**デザイン**…目標設定、物理的な環境作り、学習者の募集
・教室の運営…目標設定、学習活動の決定、教材などの**開発**、活動の**実施、内省、評価**
・『わせだの森』から見られた**諸問題の把握と分析**
・諸問題と「日本語教育」との関連についての**考察**

を進めていきました。また、『わせだの森』という学習コミュニティを運営し維持していくために、受講生たちは、授業時はもちろんのこと、授業外にも多くの時間を割いて議論をしたり教材を準備したり、また、学外に出かけていって「ちらし」を配布したりしました。この点も、これまでの学期とほぼ同様だったようです。理念を具現化するプロセスでは、実践者である受講生はそれぞれが「多様性」と向き合い、自分自身の「教育観」と向き合い、実践を形にしていきました。その成果をまとめてご報告いたします。

今年度も土曜の午後と水曜の夜の時間帯を活動の時間に充てました。そして、「つながる」「つながりをつくる」という理念が実践の軸になっていたようです。しかし、７名の受講生それぞれが考える「つながり」の意味は実は微妙に異なっていて、実践を進めていくうちにこの異なりが葛藤を生み出していきました。ただ、このこと自体は決して悪いことではありません。何が違うのか、なぜ違うのか、そして違っているとどんな支障があるのか、活動案の作成時にも活動後の振り返りでも、問い返しと議論が起こります。結局、自分たちはこの異なりをどうしたいのか、自分たち７名の「多様性」をこそ意識化しないと答えは得られません。こうして、自分たちの実践コミュニティを少しずつ固めていったプロセスが、この報告書からもうかがえます。

今後、多様な場で多様な実践者とともに実践研究を進めていくことになる受講生たちにとって、上記のプロセスを体験したことはきっと役に立つでしょう。『わせだの森』で自分たちの教育観が意識化できたのは、まぎれもなく、そこで他者と向き合えたからであり、そのためには自らもまた、相手にとっての他者とならなければならないことを理解できたと思うからです。

2012 年 10 月

早稲田大学大学院日本語教育研究科
日本語教育実践研究（１）担当
池上 摩希子

地域日本語教育実践研究
実践研究(1)報告集 2012 年度春学期
（通巻 7）

発行日　2012 年 10 月 31 日
発　行　早稲田大学大学院日本語教育研究科
〒169-8050　東京都新宿区西早稲田 1-7-14
編集責任　池上 摩希子